



俳優業の社会的地位向上で、日本人をプレゼン上手に！

俳優業キャリアの出口戦略が、日本人の演技力を育てる

2013年9月12日(木) 上山 信一

最近の若者たちはプレゼンがうまい。「ポイントは3つ…」「結論から言えば…」と実に滑らかだ。おそらく小さい頃に週刊こどもニュースで池上彰さんを見ていたからではないか。いや、最も影響を与えているのは、ジャパネットたかたの高田明社長かもしれない。彼は間違いなく名優である。相手を引き付け、楽しませ、説得し、気分よく物を買わせる。並みの俳優をはるかに超えたすさまじいコミュニケーション能力である。

さて、今回の上山ゼミの業界分析のテーマは俳優である。

日本の職業俳優の平均年収は約 200 万円

日本には今、およそ1万1700人の職業俳優がいる。うち、女性が4割。平均年齢は40歳。年収はかなりの幅があるが、平均約200万円(「平均年収.jp」などによる)。世の中の平均よりは少し低く、またこの額は、ほかのクリエイティブ系ビジネスの従事者(例えば演奏家、演出家、作家、音楽家など)よりやや低い。

俳優は間違いなく憧れの職業の1つである。最先端のファッションを装い、スポットライトを浴びる。旅番組やグルメ番組の仕事もある。ベテラン俳優が小説を書いたら、すぐに何かの賞がもらえる(という印象がある)。

しかし現実はきびしい。そんな俳優はごくごく一握りである。

クリエイティブ系ビジネスの中で最も恵まれているのは、意外にもクラシック音楽の演奏家である。平均年収は約400万円(当人たちへのインタビュー、各種データからの推計)と高い。彼らにはフルオーケストラの演奏会だけでなく、ミニコンサートや結婚式などの出番がある。一流プロだとCDも出せる。また、演奏(俳優で言えばカメラの前や舞台で演技する仕事)だけでなく、教える仕事がある。街を歩けばピアノ教室やボイストレーニング教室に出くわすし、小中高には必ず音楽の先生がいる。

こうしたクラシック音楽の産業としての裾野の広さの背景には、音楽が義務教育の必修科目になっているという事実がある。全国民がいやおうなしに、小中学校の授業でクラシック音楽にふれる。そこには音楽で生計を立てる先生と、悪い成績を付けられたくない児童・生徒と親がいる。

課外で親に言われてピアノを習う子どもたちもいる。ほとんどの子は最初はしぶしぶやっている。ところが、いつしか面白さに目覚めてくる子たちが出てくる。そのうち「高校生になったら甲子園のアルプススタンドでNHKの朝の連ドラ『あまちゃん』のテーマを奏でたいなあ」と考える子も出てくる。さらに、大人になったら音楽で身を立てたいと夢見る若者も出てくる。この業界、たとえプロの演奏家になれなくても、音楽の先生という安定した職業の道がある。恐れることはない、好きな道を究めてみようとする音楽、芸術系の大学に行く人も多い。

このようにクラシック音楽の場合、若い頃から身近に触れ、早くから楽しさに目覚め、プロを育てる仕組みがうまくできている。かくしてクラシック音楽は日本人の暮らしに根付き、音楽家たちも食べていける。この仕組みは、同じく義務教育の科目である美術やスポーツ(体育)にもある程度当てはまる。

キャリアの出口に乏しい俳優業

翻って、演劇はどうか。

国の政策では舞台芸術に対して、体験型のかかわりを増やしていく方向にあるそうだが、劇団関係者によれば、そのあおりで学校ぐるみの舞台芸術鑑賞の機会が激減しているほどだという。だが残念なことに、日本の小中高では演劇を正式な科目として教えない。国語の授業の一部でしかない。学校外の教育機関も少ない(文学座・劇団四季・宝塚などを除く)。街を歩いて演劇教室を見かけることも少ない。演劇や映画の面白さに目覚めて、将来は俳優になろうと思っても、食べていけるかどうか不安だ。俳優になれなくても、学校で教える仕事ならアリかも、とはとても思えない状況だ。つまり、キャリアの出口がない。

しかし演劇は、ギリシャ文明の頃からの伝統である。欧米社会では、今も、演劇は民主主義の基盤と考えられている。演じる、すなわち、説得力をもって振る舞うということは、異なる文化を持つ人々がコミュニケーションし、問題解決し、政治を動かすうえで欠かせない要素だからだ。

現代人の生活には、ますます演劇的素養やスキルが不可欠となっている。だからこそ海外の学校では、ミュージック(音楽)やアート(芸術)と並び、シアターすなわち演劇が独立した科目として成り立っている。

ところが日本では、演劇に対するリスペクトがあまりないようだ。単一民族の仲間うちの社会だったから、たいていのことは「あうん」の呼吸で分かりあえる。空気を察する力こそ大切で、深い対話や討論はあまり必要とされてこなかったからだろう。

そのせいか、俳優に対するリスペクトも足りない。観る対象としては、美人女優や一部の歌舞伎役者、映画やテレビのタレントが人気を集める。しかし、本多劇場やシアターモリエールあたりで活躍する俳優に何かを学ぶという発想はない。演劇を観るといって「情操教育にはいいんじゃないの」という程度の理解が大方のところではないか。

演じることもディベートの一環

実は、筆者は米国アスペン研究所の経営者向けの思想哲学の合宿研修に参加したことがある。大手企業の役員や官庁の局長クラスが15人で2週間合宿し、朝から晩まで語り合う。そこでの課外プログラムとして、班対抗でギリシャ悲劇(ソポクレス作『アンティゴネー』)を演じる機会があった。舞台の上では各人が別の人格になりきる。

すると、もとの役職はもちろん、日中の教室内での姿とは違った本人のキャラクターが浮かび出してくる。演者の個性と配役がうまく溶け合い、お互いの理解がぐんと深まった。演じることは観客を意識したディベートの一環であり、対話術を磨くことにもつながると確信した。また、なるほど演劇は政治風刺で威力を発揮するはずだとも悟った。

ここまで、あたかもグローバル人材(笑)による日本批判に終始しそうな流れ…(?)だが、もちろんそうはならない。

私は、古代のギリシャ演劇の劇団チームで練習しているうちに、子供の頃、知らず知らずのうちに演技を学んでいたことを思い出していた。

私が幼少期を過ごした大阪の街では、日常の大人たちの会話が演劇的だった。舞台は街。すべての人が俳優である。店舗では、売り手と買い手は、売り手らしい振る舞い、買い手らしい振る舞いを強いられていた。

「このダンスえらい高いやん」「いやこれ、順番待ちの人気ですねん」「そしたらチラシで宣伝せんでもええやん」「いや、ちょっと値が張るんで宣伝せんと売れませんのや」「えっ？」といった具合だ。

ボケとツッコミは経済学の実践なり

真面目なのか冗談なのかわからない。そして一見脈略のなさそうな会話を繰り返す。だが、やがてそれを通じてお互いの立場や状況に対する理解が深まり、商談における妥協の余地が急に見えてくる。「買ってよし、売ってよし」の価格と気分の均衡点を探っているのである(経済学の実践なのだ)。

この場合、演技を通り越して熱くなったり、感情的になったりするのルール違反だ。ユーモアと演技力で相手の主張にツッコミを入れる。そのあとは相手を立てて、すかさずこちらのお願いを泣き落とさんばかりに切々と訴える。この切り換えができなければ一人前の大阪人とは言えない。

今の日本人に必要なのは、単なるディベート力ではない。ユーモアを交えたこの大阪人的な演技力ではないか。論理的に正しいかどうかに加え、それを正しいと相手に思わせる力量と愛嬌が問われている。ジャパネットたかたの高田社長のセールストークも、あの顔と声と表情、立ち居振舞い、そして方言なまりがあるから、説得力がある。自分の立場(要するに売りたい)を明示しつつも、相手の立場(買い手が抱く心配や不安)への理解と共感を示す。だから名優なのだ。

大阪の街では、今でも演技が学べる

大阪の街では、今でも、家でも街でも、知らず知らずのうちに演技を学べる。

人の多いところ、電車の中や雑踏で、たとえば2人の小学生がボケとツッコミを互いに繰り返す場面に遭遇するだろう。あれは、彼らの舞台なのである。後で必ず「今日はウケたな」「周りの大人、凍ってたやんか」などと密かに反省会が開かれる。彼らは2人の間でコミュニケーションを取っているようでいて、会話を披露し、実は周囲ともコミュニケーションしているのである。そんな彼らが大人になって、大阪はもとより東京やニューヨークでタフなネゴをこなすようになる。

だからここで是非とも言っておきたいのは、何と言っても400年前のあの事件、大阪夏の陣の理不尽さである。あのとき豊臣氏が天下をとっていれば、日本は演劇国家になっていただ

ろう。生き馬の目を抜く現在の国際社会でも、丁々発止の交渉ができる日本人がたくさん輩出されていたはずだ。ところがあのかとき徳川氏が勝ってしまった。

そこから日本の没落は始まった。三河の徳川の生真面目さが日本をダメにした。(中略…)それがひいては山県有朋に代表される精神主義の陸軍文化を生み出し、(中略…)ついに太平洋戦争で負けるに至った。そして戦後も今も、ひたすら黙々とモノづくり一本やりで来てしまった。それが日本の産業構造の転換を遅らせてきた…。要するに、日本は平成不況よりも前の1945年8月の敗戦よりもそのまたはるか昔の1615年の夏(大阪夏の陣)、豊臣氏が敗れたときに、今日のグローバル化において負けるべく運命づけられていたのだ…。

日本の将来のため、俳優のためにも学校教育に演劇を取り込むべきである。一部では、学生の研修現場に精神科の患者さんを演じる俳優を派遣するビジネスを始めている劇団もある。

演劇を必修科目にし、資料棒読みやマニュアルトークを撲滅

今後はさらに裾野を広げ、あらゆる教育現場に演劇を浸透させるべきだ。英語の授業における英会話の比率が高まっているように、小中高の正規の授業科目として演劇を採用するのだ。国語の時間に、1人で教科書を読み上げる朗読なんかは時間を費やすくらいなら、掛け合いやディベートを練習させるべきだ。

そうすれば、俳優業もクラシック演奏家と同じく、ちゃんと食べていける稼業になるだろう。クラシック音楽は元々日本になかった文化だが、政府と関係者の努力ですっかり定着した。今からでも遅くない。400年前の失敗(まだ言ってる…コイツ…自己批判)は取り返せるはずだ。

そうすれば、記者会見で資料の棒読みを繰り返す経営者や、こちらの反応なぞお構いなしにマニュアルトークを繰り出す店員もいなくなる。そしてまた、大阪のようにバスや電車を待つベンチで隣の客と楽しく語らう習慣が全国に広まるだろう。かくして、日本全体が大阪のように素晴らしい街になれる(?!)。あと2年で大阪夏の陣から400年、やっと日本にも素晴らしい時代が訪れる。

(構成:片瀬京子)

(注)なお、このレポートの執筆にあたっては慶應SFCキャンパスの上山研究会(経営戦略ゼミ)の2008年春学期「俳優ビジネス分析チーム」(山崎百華、小西恵里子、岡田紗也加)及び2007年秋学期「クラシック音楽ビジネス分析チーム」(新井優大、松野慶香)の成果を参考にした。